

看護系大学における安全管理教育の現状と課題

岩波 浩美, 小川 妙子, 定廣和香子, 佐々木かほる

相 楽 有 美, 杉森みど里

群馬県立県民健康科学大学

目的：安全管理教育の充実に向けて、看護系大学における現状と課題を明らかにする。

方法：安全管理に関する教育内容の19要素について授業で取り扱っている程度を問う選択式質問と、安全管理教育の課題を問う自由記述式質問から質問紙を構成した。質問紙は、研究協力を得た21大学に所属する教員448名に郵送により配布した。

結果：95の回答を得た(有効回答率21.3%)。安全管理に関する教育内容の要素の多くは、単元あるいは授業内容の一部として取り扱われていた。自由記述式質問に記載のあった28を Berelson, B. の内容分析を参考に質的帰納的に分析し、12カテゴリを形成した。これらは『教育内容の精選と組織化』『看護基礎教育課程における到達目標の明確化』『安全管理教育に関する組織的なFD』という課題に集約できた。

結論：安全管理教育内容の多くは既に授業で取り扱われており、今後、カリキュラムへの系統的な展開について、点検・評価するための枠組みを開発する必要がある。

キーワード：安全管理, 看護基礎教育課程, 教育内容

1. 緒 言

医療における安全管理は、わが国においては、1999年の重大な医療事故の発生をきっかけに、急速に注目を集めてきた問題である。このような社会の変化に対応するため、教育内容を検討することは、保健医療専門職を養成する基礎教育機関の重大な課題である。

看護基礎教育における教育内容の検討に焦点をあてた研究は多数存在する。中でも、社会の変化に伴い必要性が高まっているものの、その内容要素や教育方法は明確になっていない、といった教育内容に対しては、基礎教育課程における実態と課題を明らかにすることを目的に、教員を対象とした質問紙調査が行われている¹⁻³⁾。これらの研究は、特定の教育内容について、各教育機関がどのように取り扱っているか、教員の知覚を通して

現状を明らかにすることにより、社会の変化に対応し、教育内容の具体的な内容を検討する指針を得るという意義をもつ。

研究者らは、安全管理に関する教育内容について、看護系大学のシラバスに記載された内容に基づき、教育内容の要素19項目と5側面を明らかにした⁴⁾(表1)。しかし、シラバスは各大学が授業の開始前に作成した公的資料であるため、個々の教員がどの教育内容の要素を重視し、どの程度授業で取り扱っているかという現状は明らかになっていない。

安全 safety とは、“危険のないことをいい、安楽、自立とともに、看護ケアを行う際の必須条件”⁵⁾であることから、看護学教育における必須の教育内容である。そのため、看護基礎教育に携わる教員は何らかの形で授業に「安全」に関わる内容を取り上げている可能性が高い。安全管理教育

表1 安全管理に関する教育内容の要素19項目と5側面

教育内容の要素	教育内容の側面
1) インフォームドコンセント 2) 患者の人権尊重	1. 安全管理と人権擁護
3) 薬剤・血液製剤の安全管理 4) 感染予防 5) 安全な看護・医療処置・検査の技術 6) 看護を提供する場の特徴に応じた安全管理の方法 7) 安全を保証する方法・システム 8) 施設・設備の安全管理 9) 安全・安全管理の定義と意義 10) 安全な医療提供に向けた現状と課題	2. より安全な医療・看護を提供するシステム
11) 医療事故防止対策 12) 誤薬の防止 13) 医療事故・事故事例・ヒューマンエラーの種類・発生要因 14) 転倒・転落の防止 15) 医療事故防止に向けた他職種との協働 16) 事故分析・危険予測の手法	3. 医療事故の予測と防止
17) 医療過誤に対する法的責任 18) 看護職の業務に伴う法的責任	4. 医療過誤と看護職の法的責任
19) 災害対策	5. 災害時の医療安全

に関する教育内容について、その実態を明らかにするためには、「安全管理に関する教育内容カテゴリ」の各要素について、教員が授業でどのように取り上げているかに焦点をあてて調査する必要がある。このようにして得られた結果は、安全管理に関する教育内容の要素が、どの程度、どの看護学領域で教授されているかという現状を示すものであり、安全管理教育の充実に資する基礎資料が得られる。また、教育の現場で授業を展開する教員が知覚する課題を明らかにし、その克服について検討することにより、質の高い安全管理教育の実現に向けた知見が得られる可能性がある。

以上の動機に基づき、本研究は、看護系大学に所属する教員を対象とした安全管理教育に関する実態調査に着手した。

なお、本研究は、先行研究⁶⁾に基づき、医療における安全管理を以下のように規定する。

安全管理とは、保健医療専門職者が専門的視点に基づき危険を予測し、クライアント及びその家族や医療従事者の外的・内的環境を整える活動で

ある。また、その目標は、単に医療事故の発生回避にとどまらず究極的にはクライアント及びその家族や医療従事者が身体的にも精神的にも脅かされたり消耗したりすることのない状態を保証することである。安全管理は、医療の質向上に向けた本質的な活動の一つである。ここでいう医療事故とは、死亡、生命の危険、病状の悪化など医療行為による身体的被害がクライアントに生じた状況を指す。

II. 研究目的・目標

1. 研究目的

わが国の看護系大学の安全管理教育の現状と課題を明らかにし、安全管理教育の充実にに向けた基礎資料とする。

2. 研究目標

- ① 看護系大学に所属する教員の安全管理に関する教育内容の授業での取り扱い状況を明らかにする。

- ② 教員が知覚する安全管理教育の課題を明らかにする。
- ③ ①②をふまえ、安全管理教育の質向上に向けた課題を検討する。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究対象

平成18年度に開学している看護系大学のうち、事前に研究協力の得られた大学に所属する教員

2. データ収集

郵送法による質問紙調査を行った。

平成18年度に開学している看護系大学のうち、事前に質問紙の送付に対し承諾の得られた21校の教育管理責任者（学部長，学科長）宛に，研究協力依頼，研究計画書，調査用紙を送付し，授業を担当する教員（常勤・非常勤を問わない）への調査用紙（研究協力の依頼，研究計画書を添付）の配布を依頼した。回答した調査用紙は，回答者が個別に投函できるよう，返送用封筒を同封した。

3. 測定用具

測定用具には，本研究において作成した「安全管理に関する教育内容の現状に関する質問紙」と「教員特性質問紙」を使用した。

「安全管理に関する教育内容の現状に関する質問紙」には，回答者の主要な担当授業と，その授業のカリキュラム上の位置づけを問う選択式質問（領域，選択・必修の別など）7項目を設定した。さらに，安全管理に関する教育内容の要素19項目について，その授業においてどのように取り扱っているかを問う選択式質問を設定した。教育内容の要素19項目とは，看護系大学のシラバスの記述内容を分析した先行研究⁷⁾により得られた教育内容カテゴリであり，選択肢は，「授業の中の一単位として取り扱っている」「授業内容の一部として取り扱っている」「取り扱っていない」の3種類と

した。

さらに，安全管理教育に関する課題を問う自由記述式質問1項目を設定し、計27項目とした。

「教員特性質問紙」には，回答者の背景を問う選択式質問（年齢，所属施設の設置主体，教員経験年数など）16項目を加えた。

このようにして作成した本研究の測定用具の妥当性は，研究者間の検討により確保した。

4. データ分析

1) 記述統計値の算出

「安全管理に関する教育内容の現状に関する質問紙」および「教員特性質問紙」の項目のうち，選択式質問に対する回答を集計し，記述統計値を算出した。

2) 教育内容の取扱い状況の算出

安全管理に関する教育内容の要素19項目について、授業で取り扱われている程度を明らかにするために、「授業の中の一単位として取り扱っている」、「授業内容の一部として取り扱っている」の回答数を集計し、回答者数に占める割合をそれぞれ算出した。次に、「授業の中の一単位として取り扱っている」と「授業内容の一部として取り扱っている」との回答を合計した“授業で取り扱っている”回答が、回答者数に占める割合を算出した。

また、安全管理に関する教育内容の5側面について、授業で取り扱われている程度と取り扱っている看護学領域を明らかにするために，次の手順で分析した。まず，安全管理に関する教育内容の5側面ごとに，先に算出した“授業で取り扱っている”回答の割合を用いて，それぞれの側面を構成する項目の“授業で取り扱っている”割合の平均値を算出した。

次に，“授業で取り扱っている”回答のうち，専門科目について，看護学領域毎に集計し，分析した。

3) 安全管理教育の課題の内容分析

安全管理教育に関する課題の内容を問う自由記述式質問の記述内容を分析対象とし、Berelson, B. の内容分析の手法を参考に、質的帰納的に分析した⁸⁾⁹⁾。分析の信頼性は、内容分析の手法に精通した看護学研究者2名にカテゴリへの再分類を依頼し、分類結果の一致率を算出することにより、検討した。

IV. 結 果

1. 対象者の背景

調査用紙送付の承諾が得られた21大学宛に、所属する教員の人数分の質問紙、研究協力依頼書、返送用封筒を送付した。送付した調査用紙は、448部であった。このうち97名（回収率21.7%）の回答が得られた。白紙回答2名分を除いた、95名分を有効回答とした。

1) 回答者の背景

回答者は男性9名（9.5%）、女性81名（85.3%）、無回答5名（5.3%）であった。年齢は、40代42名（44.2%）、50代28名（29.5%）、30代10名（10.5%）、60代8名（8.4%）、20代2名（2.1%）、70代以上1名（1.1%）、無回答4名（4.2%）であった（図1）。

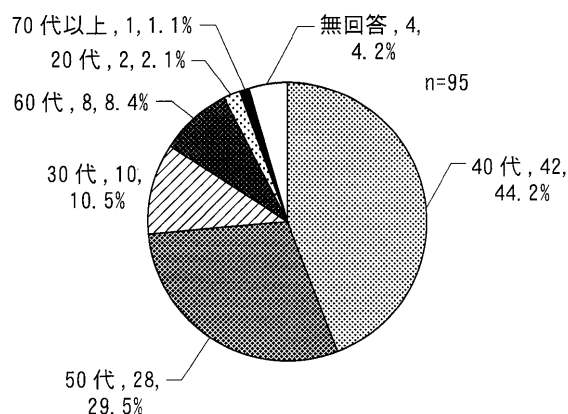


図1 年齢

対象者の雇用形態はすべて常勤であり、職位は、講師31名（32.6%）、教授30名（31.6%）、准教授25名（26.3%）、助手4名（4.2%）、その他3名（3.2%）、無回答2名（2.1%）であった（図2）。

対象者の専門領域は、基礎看護学25名、成人看護学21名、地域看護学13名、母性看護学10名、老年看護学8名、小児看護学6名、精神看護学5名、その他7名、無回答2名であった（重複回答）。

最終学歴は、大学院修士課程修了60名（63.2%）、大学院博士課程修了26名（27.4%）、大学卒7名（7.4%）、その他2名（2.1%）であった（図3）。

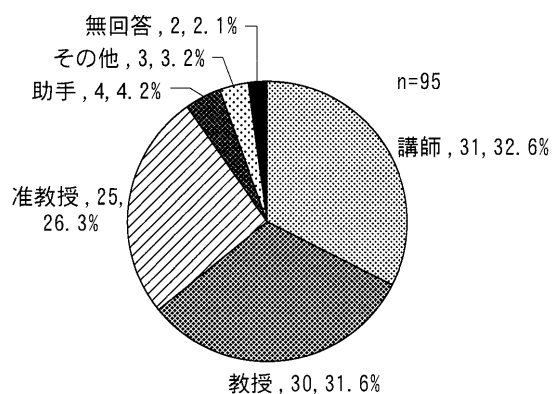


図2 職位

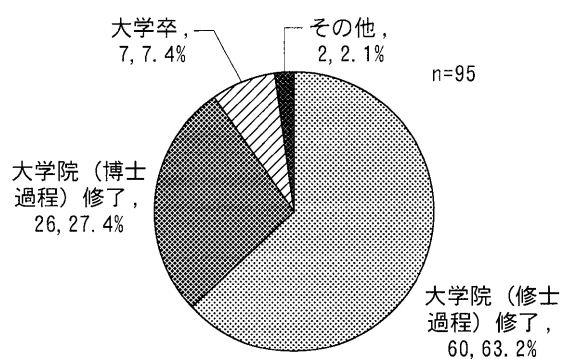


図3 最終学歴

回答者の取得資格は、看護職89名、医師4名、その他6名（重複回答あり）であった。このうち看護職89名の取得免許は、看護師免許89名、保健師免許31名、助産師免許15名（重複回答あり）であった。

回答者の教員経験年数は平均13.7年（標準偏差8.7）であり、臨床経験年数は平均9.4年（標準偏差7.7）であった。

安全管理に関連する職業経験（リスクマネージャー等）は、経験のない者が91名（95.8%）、経

験のある者が4名(4.2%)であった(図4)。安全管理に関する学会・研究会には、所属していない者83名(87.4%)、所属している者10名(10.5%)、無回答2名(2.1%)であった。

対象者の所属する大学の設置主体は、学校法人41名(43.2%)、都道府県18名(18.9%)、国立大学法人16名(16.8%)、公立大学法人14名(14.7%)、国(厚生労働省)4名(4.2%)、無回答2名(2.1%)であった(図5)。

所属する大学の所在地域は、関東甲信越32名(33.7%)、九州沖縄20名(21.1%)、北海道12名(12.6%)、東海北陸11名(11.6%)、中国四国8名(8.4%)、東北6名(6.3%)、近畿5名(5.3%)、無回答1名(1.1%)であった(図6)。

2. 安全管理に関する教育内容の取扱い状況

1) 回答者の主要担当科目

回答した科目のカリキュラム上の位置づけは、

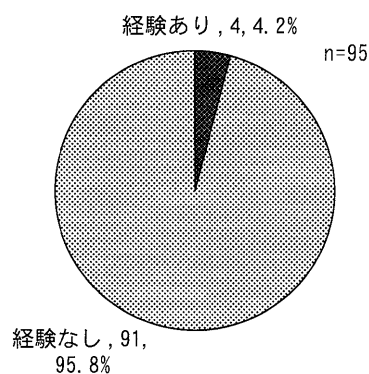


図4 安全管理に関する職業経験

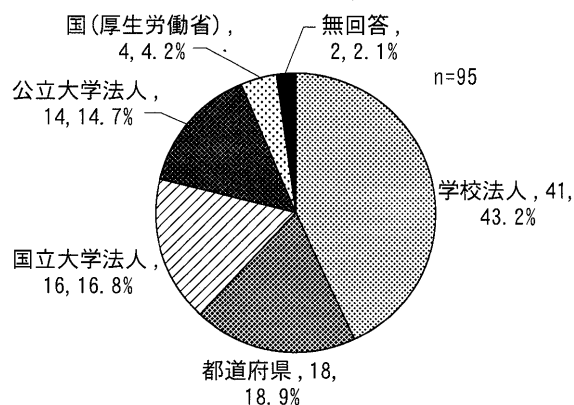


図5 大学の設置主体

専門科目78件(82.1%)、専門基礎科目12件(12.6%)、教養科目2件(2.1%)、無回答3件(3.2%)であった(図7)。このうち専門科目78件の看護学領域は、基礎看護学18件、成人看護学17件、地域看護学11件、母性看護学10件、老年看護学7件、小児看護学6件、精神看護学5件、その他4件、無回答1件であった(重複回答あり)。

2) 教育内容の要素19項目の取扱い状況

「授業の中の一単位として取り扱っている」という回答は、教育内容の要素19項目のうち「患者の人権尊重」が最も多く、16名(16.8%)であった。また、「安全を保証する方法・システム」「施設・設備の安全管理」「医療事故防止に向けた他職種との協働」「災害対策」の4項目は、「授業の中の一単位として取り扱っている」という回答が3名(3.2%)と最小値であった。

また、「授業内容の一部として取り扱っている」という回答は、「インフォームドコンセント」が最

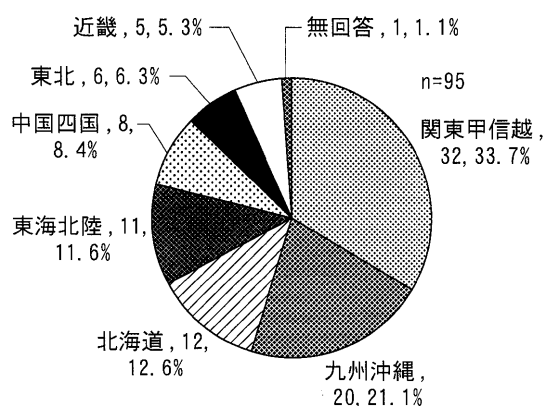


図6 大学の所在地域

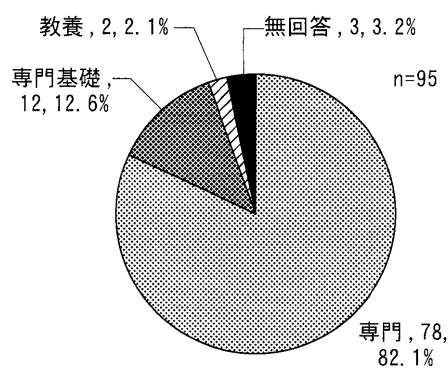


図7 カリキュラム上の位置づけ

も多く72名(75.8%)であり、「事故分析・危険予測の手法」が最も少なく20名(21.1%)であった。

さらに「授業の中の一単位として取り扱っている」と「授業内容の一部として取り扱っている」を合計した“授業で取り扱っている”回答が回答者数に占める割合は、「患者の人権尊重」が87.4%

と最も高い割合を示し、次いで「インフォームド Consent」84.2%、「感染予防」80.0%であった。

一方、最も低い割合を示したのは、「事故分析・危険予測の手法」および「災害対策」の25.3%であり、次いで「医療過誤に対する法的責任」37.9%であった。(図8)

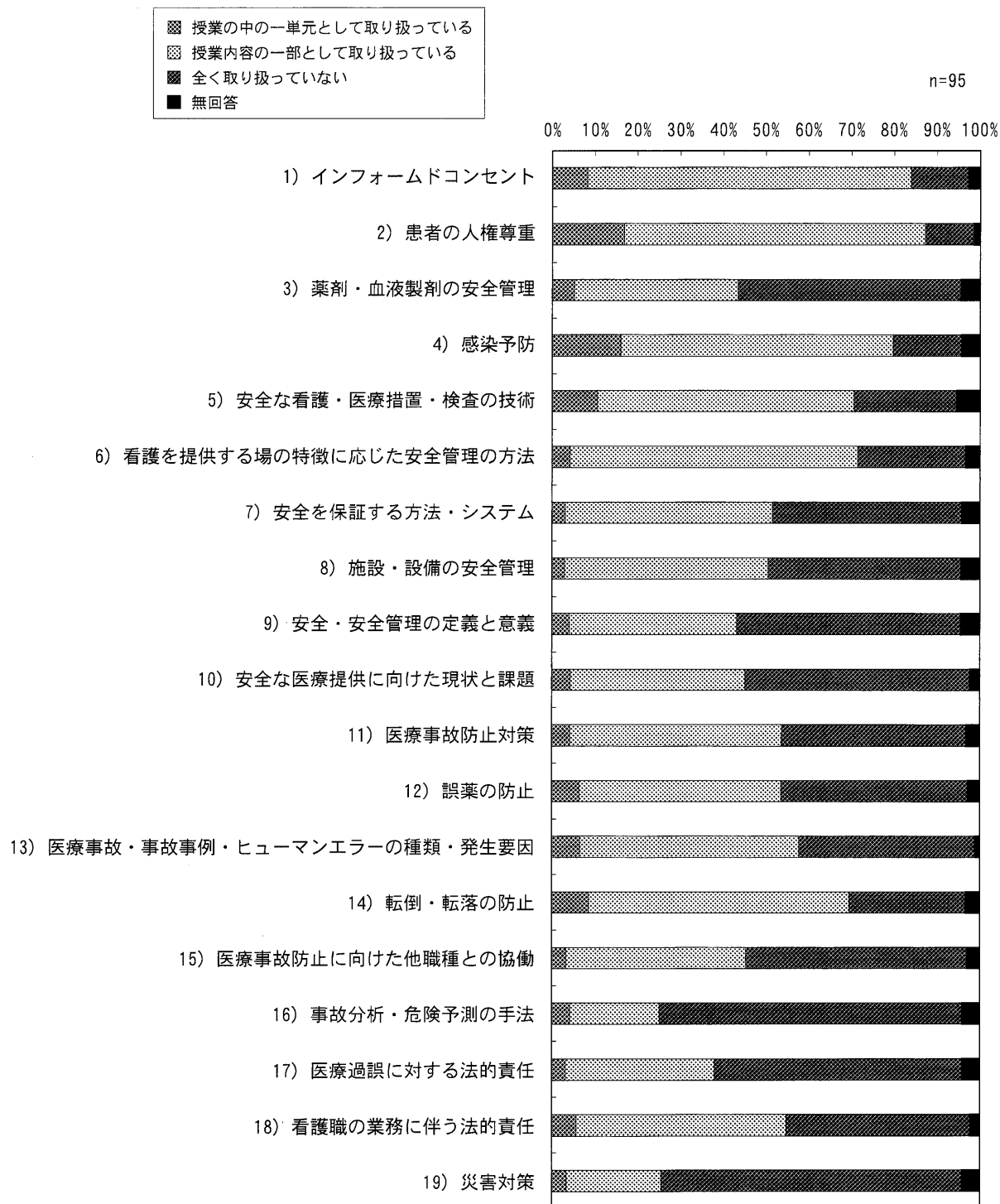


図8 教育内容の要素19項目の取扱い状況

3) 教育内容の5側面の取扱い状況

「授業の中の一単位として取り扱っている」と「授業内容の一部として取り扱っている」との回答を合計した“授業で取り扱っている”回答の割合の、安全管理に関する教育内容の各側面を構成する要素の平均は、5つの側面がそれぞれ授業でどのように取り扱われているかを示す。

〈1. 安全管理と人権擁護〉は、「インフォームドコンセント」と「患者の人権尊重」の2つの要素が構成した側面である。これらについて、授業で取り扱っていると回答した割合は、85.8%であり、5側面のうちの最多であった。

〈2. より安全な医療・看護を提供するシステム〉は、「薬剤・血液製剤の安全管理」「感染予防」「安全な看護・医療処置・検査の技術」「看護を提供する場の特徴に応じた安全管理の方法」「安全を保証する方法・システム」「施設・設備の安全管理」「安全・安全管理の定義と意義」「安全な医療提供に向けた現状と課題」の8つの要素が構成した側面である。これらについて授業で取り扱っていると回答した割合は、57.0%であった。

〈3. 医療事故の予測と防止〉は、「医療事故防止対策」「誤薬の防止」「医療事故・事故事例・ヒューマンエラーの種類・発生要因」「転倒・転落の防止」「医療事故防止に向けた他職種との協働」「事故分析・危険予測の手法」の6つの要素から構成した側面である。これらを授業で取り扱っている割合は、50.9%であった。

〈4. 医療過誤と看護職の法的責任〉は、「医療過誤に対する法的責任」「看護職の業務に伴う法的責任」の2つの要素から構成した側面である。これらを授業で取り扱っている割合は46.3%であった。

〈5. 災害時の医療安全〉は、「災害対策」という教育内容の要素から構成した側面である。この側面を授業で取り扱っている割合は、25.3%と、5側面のうち最小値であった。

以上、教育内容の5側面それぞれについて、「授業の中の一単位として」あるいは「授業内容の一部として」取り扱っている授業のうち、専門科目の看護学領域は、基礎看護学、成人看護学、地域看護学、老年看護学が上位を占めた。（表2）

表2 教育内容の5側面の取扱い状況

n=95

教育内容の5側面	“授業で取り扱っている”回答の割合		取り扱っている上位3領域
1. 安全管理と人権擁護	1) インフォームドコンセント, 84.2% 2) 患者の人権尊重, 87.4%	85.8%	①基礎 ②成人 ③地域
2. より安全な医療・看護を提供するシステム	3) 薬剤・血液製剤の安全管理, 43.2% 4) 感染予防, 80.0% 5) 安全な看護・医療処置・検査の技術, 70.5% 6) 看護を提供する場の特徴に応じた安全管理の方法, 71.6% 7) 安全を保証する方法・システム, 51.6% 8) 施設・設備の安全管理, 50.5% 9) 安全・安全管理の定義と意義, 43.2% 10) 安全な医療提供に向けた現状と課題, 45.3%	57.0%	①基礎 ②成人 ③地域
3. 医療事故の予測と防止	11) 医療事故防止対策, 53.7% 12) 誤薬の防止, 53.7% 13) 医療事故・事故事例・ヒューマンエラーの種類・発生要因, 57.9% 14) 転倒・転落の防止, 69.5% 15) 医療事故防止に向けた他職種との協働, 45.3% 16) 事故分析・危険予測の手法, 25.3%	50.9%	①基礎 ②成人 ③老年
4. 医療過誤と看護職の法的責任	17) 医療過誤に対する法的責任, 37.9% 18) 看護職の業務に伴う法的責任, 54.7%	46.3%	①基礎 ②成人 ③地域
5. 災害時の医療安全	19) 災害対策, 25.3%	25.3%	①地域 ②基礎 ③成人

3. 教員が知覚する安全管理教育の課題

回収した質問紙97のうち、自由記述式質問への回答者は28名であった。このうち8名は安全管理に関する学会に所属していた。

1) 教員の記述内容から見た安全管理教育の課題

回答者の記述は40記録単位であり、このうち安

全管理に関する課題を明記した31記録単位を分析対象とした。これらを意味内容の類似性に基づいて分類した結果、看護系大学教員が知覚する安全管理教育の課題を表す12カテゴリが形成された(表3)。

表3 教員が知覚する安全管理教育の課題

n=31

カ テ ゴ リ	記録単位数(%)
1 安全管理に関する授業の形態・提供方法・内容構成の工夫	5 (16.1)
2 安全管理に関する独立した単元・学科目の設定	4 (12.9)
3 複数の授業科目における安全管理教育内容の過不足・一貫性の検討	4 (12.9)
4 安全管理を取り扱うための授業時間数の不足	4 (12.9)
5 医療事故防止、在宅・小児における医療安全等より強化すべき教育内容	3 (9.7)
6 安全管理に関わる学生の倫理観の育成	2 (6.5)
7 安全管理に関する教育内容の体系化	2 (6.5)
8 安全管理に関する授業のカリキュラムへの適切な配置	2 (6.5)
9 安全管理を教育できる教員の不足	2 (6.5)
10 患者ケア提供時の基本的安全技術の強化	1 (3.2)
11 学生の技術習得段階に適合した安全に関する目標設定	1 (3.2)
12 安全管理教育のエビデンスとなる教材の不足	1 (3.2)

以下、教員が知覚する安全管理教育の課題カテゴリを【 】で示し、カテゴリ毎に結果を論述する。()には、そのカテゴリを形成した記録単位数が全体の記録単位数に占める割合を示す。

【1. 安全管理に関する授業の形態・提供方法・内容構成の工夫】は、講義形式では学生の印象に残らない、関連ある授業でそれぞれ強化する必要がある等、5記録単位(16.1%)から形成された。

【2. 安全管理に関する独立した単元・学科目の設定】は、単元として取り上げるべきである、学科目として必要である等、4記録単位(12.9%)から形成された。

【3. 複数の授業科目における安全管理教育内容の過不足・一貫性の検討】は、学内でのマトリックスづくりが必要、重複やモレがある等、4記録単位(12.9%)から形成された。

【4. 安全管理を取り扱うための授業時間数の不足】は、現在の時間数で取り入れることは困難、時間が足りない学生等、4記録単位(12.9%)から形成された。

【5. 医療事故防止、在宅・小児における医療安全等より強化すべき教育内容】は、教育に取り入れることは必要、子どもに関して事故防止は必須の課題等、3記録単位(9.7%)から形成された。

【6. 安全管理に関わる学生の倫理観の育成】は、職業人としての倫理観を育てることが大切等、2記録単位(6.5%)から形成された。

【7. 安全管理に関する教育内容の体系化】は、看護学としてのまとまりのあるものがほしい等、2記録単位(6.5%)から形成された。

【8. 安全管理に関する授業のカリキュラムへの適切な配置】は、カリキュラム上科目の置き方

が難しい等, 2 記録単位(6.5%)から形成された。

【9. 安全管理を教育できる教員の不足】は, 安全管理を教育する教員が少ない等, 2 記録単位(6.5%)から形成された。

【10. 患者ケア提供時の基本的安全技術の強化】は, 手洗いなど基礎的なことにしっかりと取り組むよう注意しなければならない, といった 1 記録単位(3.2%)から形成された。

【11. 学生の技術習得段階に適合した安全に関する目標設定】は, 安全な技術は学生には高い目標になる, といった 1 記録単位(3.2%)から形成された。

【12. 安全管理教育のエビデンスとなる教材の不足】は, 教育のエビデンスとなるものが少ない, といった 1 記録単位(3.2%)から形成された。

2) カテゴリ分類の一致率

2 名の看護学研究者によるカテゴリ分類への再分析の一致率は, ともに100%であった。このことから, 本研究のカテゴリが信頼性を確保していることを確認した。

V. 考 察

1. 安全管理に関する教育内容の取扱い状況から見た安全管理教育の現状

本研究が対象とした看護系大学教員が, 安全管理に関する教育内容の要素19項目を授業で取り扱っているという回答は, 「患者の人権尊重」87.4%から「事故分析・危険予測の手法」および「災害対策」の25.3%の間であり, これら19項目の取扱い状況の平均は55.3%であった。また, 授業で取り扱っていると回答した専門科目の看護学領域は, 基礎看護学を中心に, 成人看護学, 老年看護学, 地域看護学と多様であった。このことは, 安全管理に関する教育内容の要素の多くが, 看護系大学の授業の一単位として, あるいは授業内容の一部として提供されており, 提供している授業科目は多様な看護学領域にわたっている, という

現状を表している。

安全は, 安楽, 自立とともに看護ケアを行う際の必須条件であり¹⁰⁾, 看護を提供するために必須の教育内容である。また, 医療事故防止は, カリキュラム試案¹¹⁾が提言されるなど, 看護基礎教育課程における教育の重要性が急速に高まった教育内容である。本研究の結果は, 現在, 看護基礎教育課程における必須の教育内容であった患者の安全保障に加え, 医療事故防止の観点からも教育内容の検討が行われ, 教員それぞれが授業内容に反映している可能性を示す。

このような現状においては, 教員が提供している教育内容の各要素が, カリキュラムにおいて系統的に提供されているかどうかを検討することにより, 各大学における安全管理教育の充実につながる可能性が高い。そのためには, 先行研究が明らかにした教育内容の19要素 5 側面を更に洗練し, 看護系大学カリキュラムを安全管理教育の視点から点検・評価するために活用可能な枠組みを開発する必要がある。

一方, 安全管理に関する教育内容の要素19項目のうち, 「事故分析・危険予測の手法」および「災害対策」は, 授業で取り扱っているという回答がそれぞれ25.3%と, 最も低い値を示した。この結果は, これら2つの要素を授業で取り扱っている教員が少ない現状を表している。

「事故分析・危険予測の手法」とは, 医療事故の原因や業務上の危険性を分析する手段に関わる教育内容であり, 「災害対策」は, 災害など不可抗力により生じる事態に対する危機管理に関わる教育内容である¹²⁾。これら2つの教育内容は, 医療事故発生状況あるいは災害による被害といった通常の医療から逸脱した現象を取り扱うという特徴を持つ。「事故分析・危険予測の手法」および「災害対策」について, 授業で提供されることが少ないという現状は, このような教育内容の特徴に起因する可能性がある。今後, 看護実践能力の基盤を

習得することを目的とする看護基礎教育課程において、これらの教育内容をどのように取り扱うことが効果的か、到達目標も含め、慎重に検討する必要がある。

2. 教員の記述内容から見た安全管理教育の課題

教員の記述内容から明らかになった安全管理教育の課題を表す12カテゴリの類似性・相異性を検討し、カテゴリが示す課題を克服するために何が必要かを考察した。

12カテゴリのうち、【5. 医療事故防止、在宅・小児における医療安全等より強化すべき教育内容】、【6. 安全管理に関わる学生の倫理観の育成】、【10. 患者ケア提供時の基本的安全技術の強化】の3カテゴリは、特定の看護実践領域における安全や、職業倫理、安全性の高い看護技術について、安全管理教育の教育内容に位置づけ強調する必要性を指摘したカテゴリである。

次に、【2. 安全管理に関する独立した単元・学科目の設定】は、現行の授業内容から安全管理に関する教育内容を抽出し、単元あるいは学科目として設定する必要性を指摘したカテゴリである。また、【3. 複数の授業科目における安全管理教育内容の過不足・一貫性の検討】は、安全管理に関する教育内容について、現行の授業科目における組織化の適切性を検討する必要性を指摘したカテゴリである。すなわち、これら2つのカテゴリは、いずれも現行の授業科目の教育内容と安全管理に関する教育内容との関係の明確化とそれらの組織化の検討により克服できる課題である。

したがって、先に述べた【5】【6】【10】の3カテゴリと、【2】【3】の2カテゴリは、カテゴリ【7. 安全管理に関する教育内容の体系化】が指摘する、安全管理に関する教育内容の精選と組織化に直結する課題である。これら6つのカテゴリが示す教員の知覚する課題を克服するためには、『安全管理に関する教育内容の精選と組織化』

が必要である。

一方、カテゴリ【8. 安全管理に関する授業のカリキュラムへの適切な配置】は、精選・組織化した教育内容をカリキュラム上に展開する際の基盤となる、学習の順序性について検討する必要性を指摘したカテゴリである。また、【11. 学生の技術習得段階に適合した安全に関する目標設定】は、精選・組織化した教育内容を提供する際の目標設定を検討する必要性を指摘したカテゴリである。すなわち、【8】【11】の2カテゴリは、精選・組織化した教育内容を効果的にカリキュラム上に展開し、授業提供するための、到達目標の明確化に関わる課題である。このことは、看護系大学教員が知覚する課題の克服に向けて、『看護基礎教育課程における到達目標の明確化』が必要である。

次に、【1. 安全管理に関する授業の形態・提供方法・内容構成の工夫】は、授業を効果的に展開するための教授技術検討の必要性を指摘したカテゴリである。また、【12. 安全管理教育のエビデンスとなる教材の不足】は、安全管理教育のエビデンスとして活用可能な研究成果を累積する必要性を指摘したカテゴリであり、これら【1】【12】の2カテゴリは、安全管理に関する教授活動の質向上に関わる課題である。

既に述べたように、安全管理に関する教育内容は、多様な看護学領域の授業科目で取り扱われていた。このことは、看護系大学教員が、安全管理に関する教授技術やエビデンスに関する知識を獲得し、担当する看護学領域の授業に活用することにより、効果的に教授活動の質を向上できる可能性が高いことを示唆する。教授活動の質向上は、看護系大学教員のファカルティディベロップメント（以下、FDとする）の一部である。安全管理に関する教授活動の質向上をFDとして位置づけ、各大学が組織的に取り組むことが効果的である。このことは、教員が知覚する課題の克服に向けて、『安全管理教育に関する組織的なFD』が必要で

あることを示す。

加えて、【4. 安全管理を取り扱うための授業時間数の不足】および【9. 安全管理を教育できる教員の不足】の2つのカテゴリが示す授業時間数の不足、教員の不足という問題は、先に述べた『教育内容の精選と組織化』『看護基礎教育課程における到達目標の明確化』『安全管理教育に関する組織的なFD』の実現により、克服できる可能性が高い。なぜなら、精選された教育内容の精選が明確な到達目標と共にカリキュラム上に適切に組織化され、個々の教員が効果的に教授活動を展開することにより、質の高い充実した授業が提供できるからである。このことは、単に授業時間数や教員数を増加させる以上の効果を期待できる。すなわち、これらカテゴリが示す教員の知覚する課題の克服には、先に述べた『教育内容の精選と組織化』『看護基礎教育課程における到達目標の明確化』『安全管理教育に関する組織的なFD』が不可欠である。

3. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、質問紙の回収率が21.7%と低いため、結果の一般化に限界がある。

また、授業における取扱い状況から見た安全管理教育は、ほとんどの教育内容の要素が取り扱われている現状を示した。しかし、一方では、安全管理に関する教育内容の精選と組織化に直結する課題を知覚していた。本研究の結果明らかになったこれらの事実、安全管理教育の視点から看護系大学カリキュラムを点検・評価することにより、安全管理教育の充実が図れる可能性が高いこと、そのためには点検・評価の枠組みとして活用可能な研究成果を産出する必要があることを示す。

VI. 結 論

1. 安全管理に関する教育内容の各要素の多くが、多様な看護学領域において、授業の一単位

として、あるいは授業内容の一部として提供されていた。

2. このような現状においては、教員が提供している教育内容の要素が、カリキュラムにおいて系統的に提供されているかどうかを検討することにより、各大学における安全管理教育の充実につながる可能性が高い。
3. 安全管理に関する教育内容の要素のうち、「事故分析・危険予測の手法」および「災害対策」については、今後、どのように取り扱うことが効果的か、慎重に検討する必要がある。
4. 教員の記述内容から、安全管理教育の課題を表す次の12カテゴリが形成された。12カテゴリとは、【1. 安全管理に関する授業の形態・提供方法・内容構成の工夫】【2. 安全管理に関する独立した単元・学科目の設定】【3. 複数の授業科目における安全管理教育内容の過不足・一貫性の検討】【4. 安全管理を取り扱うための授業時間数の不足】【5. 医療事故防止、在宅・小児における医療安全等より強化すべき教育内容】【6. 安全管理に関わる学生の倫理観の育成】【7. 安全管理に関する教育内容の体系化】【8. 安全管理に関する授業のカリキュラムへの適切な配置】【9. 安全管理を教育できる教員の不足】【10. 患者ケア提供時の基本的安全技術の強化】【11. 学生の技術習得段階に適合した安全に関する目標設定】【12. 安全管理教育のエビデンスとなる教材の不足】であった。
5. 教員が知覚する安全管理教育の課題克服のためには、『安全管理に関する教育内容の精選と組織化』『看護基礎教育課程における到達目標の明確化』『安全管理教育に関する組織的なFD』が必要である。
6. 看護系大学カリキュラムを、安全管理教育の視点から点検・評価する枠組みとして活用可能な研究成果を産出する必要がある。

【引用文献】

- 1) 高田まり子, 堀内輝子, 鈴木佳子他(2005):
看護技術強化報告書後の静脈注射に関する教育
内容の見直しの実態, 日本看護学会論文集(看護
教育), 36; 287-289
- 2) 松下由美子(2006): 基礎看護教育課程におけ
る医療廃棄物に関する講義の検討, 日本看護学
教育学会誌, 16 (1); 13-22
- 3) 川添高志, 田中喜子, 安西恵梨子他(2003):
4年制看護系大学のカリキュラムで扱われてい
る看護・医療政策, 看護教育, 44 (8); 690-692
- 4) 岩波浩美, 定廣和香子, 佐々木かほる 他
(2008): 看護系大学における安全管理に関す
る教育内容の現状—シラバスの記述内容の分析
を通して—, 群馬県立県民健康科学大学紀要第
3巻; 53-68
- 5) 見藤隆子, 小玉香津子, 菱沼典子総編集
(2003): 看護学事典第1版, 14, 日本看護協会
出版会, 東京
- 6) 岩波浩美, 定廣和香子, 杉森みど里ほか
(2007): 「安全管理」の概念の検討—群馬県立
県民健康科学大学カリキュラムの充実をめざし
て—, 群馬県立県民健康科学大学紀要 第2
巻; 48-56
- 7) 前掲書4)
- 8) Berelson, B.; 稲葉三千男, 金 圭換訳
(1954): 内容分析, みすず書房, 東京
- 9) 舟島なをみ (2007): 質的研究への挑戦第2
版, 医学書院, 東京
- 10) 前掲書5)
- 11) 林 幸子, 坪倉繁美, 衣川さえ子他(2002):
看護基礎教育における看護・医療事故予防にか
かわるカリキュラム構築 (1), 看護展望, 27
(1); 98-103
- 12) 前掲書4)

The Current Situation and Issues Surrounding Safety Management Education in Undergraduate Nursing Programs

Hiromi Iwanami, Taeko Ogawa, Wakako Sadahiro, Kaoru Sasaki,
Yumi Sagara, Midori Sugimori
Gunma Prefectural College of Health Sciences

Objective: The aim of the present study was to clarify the current situation and issues surrounding university nursing programs in order to improve safety management education.

Method: A questionnaire was created comprising multiple choice questions about the degree to which 19 elements of safety management education were dealt with in class and an open-ended question regarding issues in safety management education. The questionnaire was distributed by post to 448 teaching staff belonging to 21 universities that had consented to participate in the study.

Results: Responses were obtained from 95 instructors (valid response rate, 21.3%). Many of the elements of safety management education were dealt with as a teaching unit or part of class content. The 28 descriptions received in response to the open-ended question were analyzed by qualitative induction using B. Berelson's content analysis method for reference, and 12 issue categories were formed. These were summarized into issues of "careful selection and organization of education content", "definition of attainment targets in undergraduate nursing programs", and "systematic Faculty Development regarding safety management education".

Conclusion: These findings revealed that much of the content of safety management education is already being handled in class. However, for future systematic development of the curriculum, it is necessary to develop a framework for examination and evaluation.

Key words: safety management, undergraduate nursing programs, educational contents